

□海外文献紹介□

結腸および直腸癌—放射線検査で見落としした 61 症例

Carcinoma of the colon and rectum tumors missed by radiologic examination in 61 patients: *Bolin S, Franzen L, et al* (Cancer 61: 1999-2008, 1988)

大腸内視鏡検査が導入されてからでも、現在なお、大腸癌の診断には注腸検査が広く用いられている。

本論文では、過去 13 年間の外科的切除を受けた 708 人の大腸癌を retrospective に調査、特に見落とし例 61 人の特徴を検討し、注腸検査の診断能力を評価した。

この結果によると、癌は 731 病変あり合計 741 回診断された。そのうち 647 人、667 病変が 667 回正しく診断され、sensitivity を計算すると

90%であった。false negative 例のうち 52 人、55 病変、63 回の診断が retrospective にみて病変が認められた。したがって、著者の提唱する potential sensitivity は 99% になった。見落とし例で、実際に診断されるのに要した期間は 0~122 か月、平均 20 か月であったが、ステージが有意に進んでいることはなかった。これはたぶん slow growing の癌が多いためと考えられた。39 人が注腸検査、21 人が内視鏡検査、1 人が小腸透視のとき見つけられている。大きさは 10~105 mm、平均 35 mm で、61 人中 11 人 (18%) が多発病変であった。部位では右側結腸に 39% 認められ、全症例中右側結腸に癌があったのは 21.5% なので、有意に多かった。その理由として、この領域の放射線検査の技術的な問題、

洗腸の困難さ、特に洗腸液が残存してバリウムののりが悪くなること、ハウストラが深いことなどが考えられた。全症例と比較して有意差はなかったが、見落とし例の 56.3% は S 状結腸と直腸にあった。

内視鏡検査と注腸検査はそれぞれ欠点があり、欠点を補う意味で相補的な関係にある。したがって、両者を併用することがいいことは明らかであるが、今回の検討から、著者らは注腸検査の potential sensitivity が 99% あったので、読影上のミスを最小にできるならば、なお注腸検査は大腸癌の検出方法として優れていると結論している

(愛知県がんセンター消化器内科

李 清住 抄)